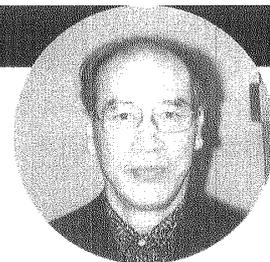


## 特集 色彩学の先達から

私の日本色彩学会  
パーソナル・クロニクル

金子 隆芳



編集部のご提言により、学会における「自分の足跡」を辿っているうちに年表形式の学会個人史ができた。しかし羅列的な年表ではお愛想もないということで、編集部のご示唆により適宜パーソナルなコメントを行间にいった（○印のパラグラフ）。ともかくこのような機会を戴いたことは有り難く、よくもわるくも当人には過去を顧みるよすがとなった。なおデータはニュースと学会誌に限った。

凡例：(4-18)→協会ニュース Vol.4, p.18,  
(No.155-1)→学会ニュース No.155, p.1  
[10-3]→学会誌 Vol.10, p.3

協会ニュースは（編集に係わった一人として申し訳ないことながら）パジネーションに誤りが多く、また発行の遅れた時期には年度に食い違いもあるので、それぞれ一定の修正をした。

\*\*\*\*\*

1956 (昭31) 色彩科学協会入会（この年の8-11月期）(2-16)

○ガリオア・フルブライト留学から帰って復学したのが1954年秋。留学中のリサーチは生理心理学（主に人間の脳波）だったが、帰国後は主任教授の抱持ちで照明学会、テレビジョン学会あるいは日本色彩研究所などに入出入りしているうちに色彩に関わるようになった。その折り森礼於氏から色彩科学協会初期のガリ版刷りのニュースを戴き、氏に推されて入会。日本色彩研究所現理事長の平井敏夫氏は同期。

それ以前、色彩学は D. B. Judd: Basic correlates of the visual stimulus, S. S. Stevens (ed.) *Handbook of experimental psychology*, Wiley, 1952, pp.811-867を留学中に読んだ程度。まだ Judd という名前の有難みを知らず、理解も要領を得なかった。ジャッド氏のこのテキストはグロサリーつきで初心者向きと言ってよいと思うが、心理学分野以外にはあまり知られていないかもしれない。日本語のテキストは日置隆一「測色学」応用物理学会編：総説応用光学（1954）（第10章）に親しんだ。東堯先生の『色』河出書房

（1947）も早くから手元にあったが、親しむところまで行かなかった。

1958 (昭33) ニュース編集委員（4巻2号より11巻4号まで）、色に関する用語（生理・心理）の JIS 原案作成委員

[小論] 色票の大きさと明度スケール（成沢玉代氏と共著）(4-18)

[関東支部第1回研究発表会] 色刺激面積と純度差弁別 (4-32)

[海外ニュース] アメリカ WFIU 局におけるモノクロ・テレビ上のベンハム・カラー実験の成功について (*Am. J. Psychol.*, 1958, 71, 606-607) (4-46)

1959 (昭34) 関東支部幹事（昭和37年度まで）色の比較方法の JIS 原案作成委員

[ロータリー] プルフリッヒのステレオ効果 (5-10), 主観色 (5-42)

○色彩科学協会ニュース各号の最終ページのカラー・ロータリー欄は日置隆一先生のご提案による用語解説風の随筆欄で、5巻1号から始まり協会ニュースの最終号（15巻6号）まで続いた。

1960 (昭35) MCS 研究会委員

[小論] 巡航中の機上における輝度と色温度の測定（小保内・大川両氏と共著）(6-43)

[ロータリー] アルベド知覚とタウレス指数 (6-16), ちらつき刺激におけるバートレイ効果 (6-48),

○MCS 研究委員会の発足については次のようなコメントがある。すなわち当協会には以前マンセル研究会があつて、大戦直後の不自由な中で好愛の士が集まって勉強した歴史がある。その後、測色、色覚、配色の3分科会がつくられ、それぞれ研究に努めた。しかるに近頃はそういった学問鍛錬の場がなく寂しい思いがしていたところ、現下契緊のテーマである Metric Color Space の徹底的検討を目的とする MCS 研究会が設置された（コメンテーター不詳）。(6-39)

1961 (昭36)

[文献抄録] ① M. Richter; Die Beziehung zwischen

den Farbmazzahlen nach DIN 6164 und den Ostwaldmazzahlen, *Farbe*, 1957, 6, 49-62. (7-31) ② R. L. Gregory; A blue filter technique for detecting eye movements during the autokinetic effect. *Quart. J. exp. Psychol.*, 1959, 11, 113-114. (7-36)

[MCS文献] ①D. Nickerson, D. B. Judd, und G. Wyszecki; Ueber eine Transformation des Normvalenzsystems in ein empfindungsgemaess gleichabstaendiges System auf der Grundlage des Munsell Systems, *Farbe*, 1955, 4, 285-288. (7-38) ② C. J. Bartleson; Notes on the Nickerson-Judd-Wyszecki chromatic value transformation, *J.O.S.A.*, 1959, 49, 489-490. (7-38)

[ロータリー] 両眼交代と両眼光沢 (7-32)

1962 (昭37) 色彩科学ハンドブック実務委員

[小論] マンセル明度関数の諸形式 (8-35)

[MCS文献] D. A. Shklover, The equicontrast colorimetric system. *Visual problems of colour*, No.8. National Physical Laboratory, 1958, pp.605-614. (8-37)

[関東支部第5回研究発表会] 光化学的反応仮説による Cobb-Judd明度関数の拡張 (8-46)

[ロータリー] アブニー効果 (8-8)

[ハンドブック] 「色感覚の基礎的性質」色彩科学ハンドブック (南江堂) 7章3節

1963 (昭38) 理事新任 (ニュース編集副担当, 9巻2号より11巻4号まで), カラーテレビ研究会委員, MCS分科会世話人

○MCS研究会は前年度をもって予定の二年計画を終了したが, 協会の主要な分科会活動の一つとして継続となり, その世話人となった (9-14)。結局, 同研究会は翌昭和39年3月31日で終了したが, たまたまMCSは筆者の学位論文のテーマでもあり, この研究会では随分と勉強させてもらった。その後, 同研究会は昭和42年度から UCS (Uniform Color Space) 研究会と改称して印東太郎先生を世話人として再発足し (11-40), 協会としての最終年度 (昭和45年度) まで36回の開催を数えた (16-48, 17-21)。

[小論] 女性服装の配色美に関する研究: 白黒チェックの場合 (藤井千枝氏と共著) (9-10)

[新刊紹介] ① G. Wyszecki; *Farbsysteme*, Musterschmidt Verlag: Goettingen, 1960, pp.144. (9-19) ② R. C. Teevan & R. C. Birney (ed.),

*Color visioin : An enduring problem in psychology*. D. Van Nostrand: Princeton, N. J., 1961. (9-45)

○ヴィゼツキー書でいうファルプシステムは近頃の使用法におけるカラーオーダー・システムのそれである。システムだけで一書をなすというのも珍しく, 小冊子ながらたいへん啓発的で, 実際, 同書には随分世話になった。

[ロータリー] マッハ・リング (9-8), ベゾルトの混色効果 (9-24)

[アクタ] Hyperbolic chromatic value coordinate system. *Acta Chromatica*, 1963, 1, 51-59.

○これは筆者の学位論文の一部。いわゆるクロマチック・バリュウ空間におけるバリュウ関数としてCobb-Judd関数を使用し, パラメータを調整して各種色空間を一括して表そうと試みたもの。(ニッカーソン女史が日置先生あて書簡の中でこれを「ホメテイタ」とは先生からのプライベート情報。)

1964 (昭39) 理事留任, 色彩教育委員会委員

[新刊紹介] 三浦寛三『色彩学概論』創文社, 1963 (10-20)

[ロータリー] カラー・シンボリズム (10-16)

[アクタ] A reconsideration of the Cobb-Judd lightness function, *Acta Chromatica*, 1964, 1, 103-110

○これは筆者の学位論文の一部。Cobb-Judd明度関数にパラメータを加えて妥当性を高めたもの。折からNBSに在外研究中の高崎宏氏によれば当のジャッド氏は本論文をたいへん喜んだそうで, その後, M. H. Appley (ed.) *Adaptation level theory*, Academic Press, 1971, pp.147-156に詳しく紹介してくれている。またドイツではKlaus D. E. Richter氏が *Antagonistische Signale beim Farbsehen und ihr Zusammenhang mit der empfindungsgemaessen Farbordnung* (バーゼル大学学位論文, 1969) に引用してくれた。

1965 (昭40) この年, 通常総会も役員改選もなし (委細不詳)。

[電気四学会連合大会] 色覚とカラー・テレビジョン (11-29)

[関東支部第96回例会講演] 色差の心理計量法 (11-43)

[新刊紹介] L. M. Hurvich, Dorothea Jameson, & D. H. Kranz, Theoretical treatment of selected visual problems. R. D. Luce, et al. ed. *Handbook of*

*mathematical psychology*, III, Wiley, 1965, pp.100-159 (11-39)

[ロータリー] ブロッホの法則, 色名呼称法 (11-24)

[アクタ] A study on rapid declining processes of color sensation. *Acta Chromatica*, 1965, 2, 10-17.

○これはタイトルの示す通り, 色覚の時間過程の速い位相を問題としている。必ずしも追試ではないが, D. Farnthworth, A temporal factor in colour discrimination. *Visual problems of colour* (No.8) London: National Physical Laboratory, 1958, 421-444.に触発された実験の報告。ファンズワース氏はこの論文でマンセル型, ライト型, マクアダム型のUCS空間の違いが, それぞれの基づく色差弁別実験における試料観察の時間的オーダーの違いにあり, それが一定の空間軸上の歪みとなって現れると言う。その論旨はスマートで, 筆者が感銘を受けた論文。しかもUCS論にとって無視できない重要な所見だと思っただが, あまり言及されない。ただファンズワース氏はグラフィックな解析にとどまっているので, それを数式化しようとしたのが前掲の筆者のクロマチック・バリユウ・システムの試みでもあった。

1966 (昭41) 理事新任 (ただし任期1年) (再びニュース編集担当, 12巻5,6号より15巻6号まで)

○前年度, 通常総会がなかったということは由々しきことで, 当時, 学会がいかに苦境にあったかを物語る。赤字財政のどん底の学会を引き継いだ新会長の金沢寿吉先生が理事会で「呻いておられた」というのは共に理事であった富田正利氏との語り草であった。

[書評] 塚田 敢『色彩の美学』 紀伊国屋, 1966 (12-30)

[新刊紹介] ① Graham, C. H. (ed.), *Vision and visual perception*, Wiley, 1965, vii-pp.637. (12-6)

②金子隆芳『色の科学』みすず書房, 昭和43年 (杉山芳雄氏による拙著の書評)。 (12-31)

○杉山氏は本書について著者が心理学畑であるに拘わらず (!?) 色の科学の厳密さは失われていないと評価しながらも, 用語法や記号法に対する苦言には杉山氏らしい厳しいものがあつた。当時, UCS委員でもあつた杉山氏は論文・新刊紹介に非常に精力的だつた。同書はやかまし屋で知られた広瀬誠一先生も紹介してくれたが (色材協会誌, 1968, 41, No.12), 同書の「親ヒロセイズム」のせい, こちらは不相応な賛辞を戴いた。ところで昭和41年度のニュースが昭和

43年初版の同書を紹介しているということは当時のニュースの発行がそんなにも遅れていたということ。

1967 (昭42) 理事新任

[小論] CIE (1963) UVW系のひとつの検討 (13-32)

[新刊紹介] ①W. D. Wright, *The rays are not coloured. Essays on the science of vision and colour.* Adam Hilger, London, 1967. (13-18)

②W. Schultze: *Farbenlehre und Farbenmessung* (rev.), Springer, 1966, pp.83 (13-34)

[ロータリー] 残像の諸相 (13-36)

1968 (昭43) 理事留任

[新刊紹介] 関 秀光編『色彩管理: 企業のカラー戦略』日刊工業新聞社, 1968, pp.232. (14-8)

[ロータリー] 定量混色図 (14-12), 目標色と限界色 (14-24)

1969 (昭44) 理事新任 (ニュース担当当年度まで)

[UCS文献] ①ア・ベ・マトビエイエフ & エヌ・エム・ベリャエワ 均等色差系, 『スヴィエトテクニカ』, 1965, 9, 1-6. (15-22) (原著ロシア語)

②ア・ベ・マトビエイエフ 等色差空間構成の諸問題, 『スヴィエトテクニカ』, 1964, 12, 1-7. (15-23)

[ロータリー] アウベルト関数とコールラウシュ屈折 (15-8), 色視野 (15-24), 明度・強度・明澄度・飽和度 (ヘッセルグレン系) (15-32), 暗度段階 (Dunkelstufe) (15-40)

1970 (昭45) 理事留任 (『アクタ』担当か)

[UCS文献] W. Schultze; Comprehensive comparison of seven color-difference formulae, *CIE E1-3-1* (16-48)

1971 (昭46) 『アクタ』2巻2号編集代表

○わずか1回の『アクタ』の編集であつたが, 欧文誌のエディターを務められたのは一学徒として名誉なことであつた。

1972 (昭47) 『アクタ』編集委員 [1-37] (昭和49年まで), 文部省出版補助金申請係 [1-80, 115, 144]

○*Acta Chromatica*には文部省出版助成金が一度はついたのであるが, その後の発行が停滞し, 失格した。この頃以後, いわゆる学園紛争や大学の筑波移転問題などに煩わされ, 学会とすっかり疎遠になった。以上, ニュース編集担当が比較的長かつたが, この間, ご協力戴いた編集委員諸氏にこの機会に深謝。

\*\*\*\*\*

1980 (昭55) 新編色彩科学ハンドブック編集委員,  
同実務委員, 同心理学部門主査

[ハンドブック] 「色表示系と色覚の基本次元」新編色彩科学ハンドブック, 東大出版会, 11章1節

1982 (昭57) [小論] ベルリンAIC報告: ベンハム・カラーのマンセル空間表示とベンハム・カラー決定要因の分析 [6-101]

1986 (昭61) 会長, 色彩科学事典編集委員長

[挨拶] 日本色彩学会長に就任して [10-100]

○ほとんど10年の学会との空白があったので, 当時の会長納谷嘉信先生から次期会長候補の突然の打診があったときには晴天の霹靂。支部長の経歴もない。結局, 有り難くお引き受けはしたが, 学会に戻った時には今浦島の気分であった。

1987 (昭62) [挨拶] 色彩科学用語事典企画にあたって (No.131-2)

○ハンドブック以来, 学会には機関誌以外の出版活動がないので, かねて意中のロータリーの単行本化について会長提案し, 理事会の了承を得た。「これがまとめれば本になる」とはロータリー欄を提案した日置先生のモノログであった。ただ実際問題として既存のロータリーでは間に合わず, 結局, 多くの会員諸氏による再執筆となった。

1990 (平2) ISO/TC187国内委員会委員兼委員長

1991 (平3) [挨拶] 色彩科学事典発行にあたって (No.155-1)

○ロータリー単行本化の書名は日本色彩学会編『色彩科学事典』(朝倉書店)となった。足掛け5年, この間, 今井弥生会長と太田安雄会長に事業を引き継いでいただき, お陰で完成した。

1993 (平5) [報告] カラーオーダーシステム国際標準化の行方: ISO/TC187国内委員会中間報告 [16-134]

[新刊紹介] ダビドフ『色彩の認知新論』(金子訳) マグロウヒル出版 (1993) (内川恵二氏が拙訳書を紹介) (No.167-5)。

1994 (平6) [論説] カラーオーダーシステムの構成概念の変遷: 物理学から心理学への回帰 [17-220]

○この年, 名誉会員に推戴された。

1995 (平7) ISO/TC187国内委員会委員長を品田登氏に引継。

[報告] 新しい学校教育用色覚検査表 [19-71]

○新しい検査表CMT (Color Mate Test), 別名「色の

なかまテスト」は小学校教育に相応しい色覚検査のあり方をめざし, 眼科の高柳泰世氏と共同で開発。

[新刊紹介] 金子隆芳『色の科学』色彩科学選書1, 朝倉書店 (1995), (みすず書房刊同名旧著の改訂版, 坂田勝亮氏による書評) (No.176-6)

1996 (平8) [新刊紹介] 高柳泰世『つくられた障害「色盲」』朝日新聞社 (1996) (No.183-6),

1998 (平10) 新編色彩科学ハンドブック (第2版) 編集委員, 同部門主査, JIS (色に関する用語) 改訂委員

[ハンドブック] 「色の心理的屬性次元, 現象的特性, 様相間属性間効果, 認知情動特性」, 新編色彩科学ハンドブック (第2版) 東大出版会, 9章1,4,5,6節 (一部, 富家直氏と共著)

1999 (平11) 物体色の色名JIS原案作成委員

[新刊紹介] 自著紹介『色覚異常に配慮した色づかいの手引き: 色彩バリアフリーマニュアル』(高柳泰世氏と共著) ぱすてる書房 (1998) (No.200-11)。

○昭和61年, 日本教科書協会・図書研究センターは「色覚異常児童生徒のための教科書色刷り改善の手引き」を作成した。高柳氏はそのときの作成委員であるが, 同じく委員に亡友富家直氏があった。本書はその手引きを引き継いだ新訂普及版。

2000 (平12) [随想] 物体色のベツォルト・ブリュッケ効果 [24-75]

○マンセル系におけるこの現象の特異性を早くに指摘した亡友水野欽司氏へのレクイエム。

○チャンスがなく最後になってしまったが, 好きな本を一冊掲げたい。P. J. Bouma, *Physical aspects of colour, An introduction to the scientific study of colour and colour sensations*. N. V. Phillips Gloeilampenfabriken, Eindhoven, The Netherlands (trans. by W. De Groot), 1947, pp.312. 原著はオランダ語。ヨーロッパ色彩学の雰囲気が良い。いまや古典というべきか。

\*\*\*\*\*

謝辞: 本稿の執筆に当たっては先達の川上元郎先生に根ほり葉ほりお尋ねしたことも多く, 先生にはたいへん迷惑をおかけした。記してお詫びと謝辞とする。昭和31年, 文部省の科学研究費による「UCS色空間の総合的研究」(日本色彩研究所)に分担研究者として参加し, そのとき先生に色彩学の手ほどきを受けたのがそもそもの始めであった。